

2019. Chicago, Oct.

- 9) 中村行宏. (口頭) 異なったシナプス前モジュールの組み合わせによるシナプス伝達の不均一性. 生理学研究所研究会「ミクロからマクロに至る脳の構造と機能のダイナミクス」. 岡崎, 11月.
- 10) 鈴木江津子, 榎山俊彦. (ポスター) M1 ムスカリン受容体による線条体中型有棘細胞からコリン作動性介在ニューロンへの GABA 放出抑制. 第 93 回日本薬理学会年会. 横浜, 3月. (紙上開催)
- 11) 榎山俊彦, 鈴木江津子 (口頭) 線条体中型有棘細胞からコリン作動性介在ニューロンへの GABA 放出の M1 ムスカリン受容体によるシナプス前抑制. 第 97 回日本生理学会大会. 別府, 3月. (誌上開催)
- 12) 西 晴久, ニヨンザバフランソア. (ポスター) マスト細胞のメラトニン合成酵素の上昇. 第 93 回日本薬理学会年会. 横浜, 3月. (紙上開催)

病 理 学 講 座

教	授：松藤 千弥	
臨床専任教授	池上 雅博 (病院病理部に出身中)	人体病理学：消化管の病理
教	授：清川 貴子 (病院病理部に出身中)	人体病理学：産婦人科の病理
教	授：鷹橋 浩幸 (病院病理部に出身中)	人体病理学：泌尿生殖器の病理, 分子病理学, 診断病理
准 教	授：千葉 諭	人体病理学：肝, 骨髓, 循環, 脾, 胎生形態学の病理
准 教	授：野村 浩一 (病院病理部に出身中)	人体病理学：産婦人科の病理
准 教	授：濱谷 茂治	人体病理学：消化管の病理
講	師：遠藤 泰彦 (富士市立中央病院に出身中)	人体病理学
講	師：原田 徹 (病院病理部に出身中)	人体病理学：呼吸器疾患, 肝疾患の病理
講	師：鹿 智恵	分子病理学
講	師：小峯 多雅 (厚木市立病院に出身中)	人体病理学：肝臓, 腎臓の三次元的構造解析

教育・研究概要

当病理学講座における研究の目的は、形態学を基盤として病気の原因、形態学的変化を追及することにある。使用する材料は、剖検および外科的に切除あるいは生検された人体材料である。これらを、光学顕微鏡、電子顕微鏡、形態計測、免疫組織化学、分子病理学等の手段を用い検索した。

I. 消化管に関する研究

1. 早期大腸癌のリンパ節転移予測因子の検討
 粘膜下層に浸潤する大腸癌 (pT1 大腸癌) のリンパ節転移 (Lymph Node Metastasis: LNM) は、10~15%である。静岡県立静岡がんセンターで治療された pT1 大腸癌のうち、連続する 339 症例で、病理組織学的因子とリンパ節転移の相関を検討した。我々は、病変を PG (polypoid growth) type/NPG (non polypoid growth) type に分類することにより、大腸癌治療ガイドラインに規定された粘膜下層浸潤距離 (Submucosal Invasion Depth: SID) の問題点を明確にし、SID を除外した LNM 予測のアルゴリ

ズムを作成した。LNMは339病変のうち37病変(10.9%)に認められた。我々のアルゴリズムでは、NPG type, リンパ管侵襲, 簇出2/3の3つの因子の少なくとも1つを含む249病変のうちLNMは36病変(16%)であった。因子のない90病変のうちでLNMを認めたものは1病変(1%)のみであった。以上から、SIDを除外したアルゴリズムを用いることで、病変を高リスク群と低リスク群に分けることができた。

2. 手術された大腸癌検体の取扱いの適正化の検討

大腸癌手術材料の取扱いについては、大腸癌取扱い規約で詳細に規定されている。しかしながら、進行大腸癌のpT4a大腸癌の診断においては、規約で規定されている大腸癌の切り出し方法では発見できない病変がある。大腸癌取扱い規約でpT4aは癌が漿膜表面に接しているか、またはこれを破って腹腔に露出している病変(SE)として定義されている。我々は、pT4a大腸癌と診断された自験例44例(静岡県立がんセンター手術症例)において、SE発生部位を、詳細に検討した。部位は腸間膜付着側と腸間膜非付着側に分類して検討した。44例に対し、80箇所(切片)のSEを同定した。部位別では腸間膜漿膜で30箇所(38%)、腸間膜非付着部で50箇所(62%)であった。腸間膜非付着部での分布を詳細に検討すると、腸間膜非付着部辺縁でのSEを25箇所(50%)で認め、同部でSEが多いことが判明した。PT4a大腸癌を、大腸癌取扱い規約で推奨される大腸長軸に平行に割を入れるやり方では正確に評価することは難しく、病変と腸間膜の位置関係を重視した大腸長軸に垂直に割を入れる方法をとることが有用であると考えられた。

II. 泌尿生殖器に関する研究

1. 前年度に引き続き、前立腺癌の術前における臨床・病理学的因子の予後予測能に関して、比較検討を行った。2019年度においては、中間リスク群、術前Gleason score 3 + 4 = 7の前立腺癌において、各臨床・病理学的因子の、術後病理所見の予測能を比較検討した(224例)。その結果、生検におけるGleasonパターン4の割合が独立した術後予後不良の予測因子であった。

III. 女性生殖器に関する研究

1. 子宮頸部腺癌について

1) HPV(Human papilloma virus)非関連子宮癌の代表である胃型腺癌の組織診断にはTFF2

(Trefoil factor 2)の免疫組織化学が有用であることを明らかにした。

2) 多施設共同研究の結果我々が提唱した子宮頸部腺癌の新分類(International Endocervical Adenocarcinoma Criteria and Classification)は2020年に改訂・発行されるWHO分類に反映された。頸部腺癌の各組織型におけるMELF(Microcystic, elongated, and fragmented)型浸潤形式と予後との関係を明らかにした。

3) 上記IECCで新たに提唱された組織型Invasive Stratified Mucin-producing Carcinoma (ISMC)の形態的特徴の詳細をまとめた。

2. 卵巣明細胞癌の予後について以下の結果を得、それぞれ論文として発表した。

1) ARID1A(AT-rich interactive domain-containing protein 1A)欠失例ではgemcitabine投与によって予後が改善される可能性が示唆された(Gynecol Oncol 2019; 155(3): 489-98)。

2) HNF1B(hepatocyte nuclear factor 1 homeobox B)発現と化学療法後の予後との関連が示唆された(Clin Cancer Res 2019; 25(13): 3962-73)。

IV. 呼吸器に関する研究

1. 肺小細胞癌の発生過程における3p24, 3p12, 3p22.2, 3p25.3および3p14.2複数領域の欠損と意義

背景・目的として、肺癌、特に扁平上皮癌や小細胞癌のような喫煙関連肺癌の発生に関する最も有力な説は、3番染色体短腕(3q)領域にある未知の責任腫瘍抑制遺伝子の不活化が初期に起こり、他の染色体変化や遺伝子変化は、比較的に進行してから起こるという説である。しかし、3pにある肺癌の発生・進展に関連する責任遺伝子は未だに明らかにされていない。マイクロサテライト不安定性(Microsatellite instability: MSI)解析法は、染色体上にある遺伝子塩基配列の中または近傍に存在するマイクロサテライトマーカーを用いて、標的遺伝子の局在を突き止める最も有力な検索方法として以前から知られている。昨年度、我々はこの解析法を用いて肺扁平上皮の発生と関連する腫瘍抑制遺伝子が3p22領域に存在している可能性を見出した。今年は、もう一つの喫煙関連肺癌である小細胞癌の発生過程と3p染色体変化との関連性を明らかにすることを目的とした。

材料・方法としては、外科手術より得られた肺小細胞癌21例を対象とし、未染色FFPE切片から癌

部と非癌部組織をマイクロディセクション法により採取した。それらの組織からDNA抽出を行い、3p全領域に存在する日本人もしくはアジア人においてヘテロ接合型のマイクロサテライトマーカー18個を選び出し、網羅的にMSI解析を行った。また、病理組織学的に同じ神経内分泌腫瘍のカテゴリーに分類される肺大細胞神経内分泌癌21例も対照として同様の手法にて解析を行った。対照例の大細胞神経内分泌癌における18個のマーカーのMSI平均頻度は27%であり、小細胞癌における18個のマーカーのMSI平均頻度は54%であった。そして、小細胞癌の発生過程において高頻度に染色体の欠損を生じた領域は、3p24, 3p12, 3p22.2, 3p25.3および3p14.2であることを明らかにした。この結果から肺小細胞癌の発生と関連する腫瘍抑制遺伝子は3pの複数領域に存在している可能性が考えられた。

V. 肝・胆・膵に関する研究

1. 一般的に肝組織の基本構築は、門脈域の線維化の状態（架橋の有無など）が指標とされているが、胆管系の情報は反映されていない。そこで、正常肝小葉内での肝細胞索と毛細胆管からと門脈域での細胆管・小葉間胆管へと至るつながりが病的に、肝臓内でどのような状態で障害されているのかを観察してみた。材料は、慢性肝炎を含む各種肝疾患の肝生検症例166例を用い、免疫組織化学染色にてCD10, CK7を染色した。CD10で毛細胆管を、CK7で細胆管・小葉間胆管をそれぞれ描出し、胆管系の保全状態を観察していくと、毛細胆管の状態や細胆管増生などは、様々な病態や基礎疾患により影響を受け、その形態を変えることがわかった。現在、データを集積し、解析中で、最終的には論文投稿を行う。

2. 膵癌の腫瘍免疫について

癌において、組織学的に3次リンパ装置（癌周囲のリンパ濾胞 Lymphoid follicles around cancer: LFC）の形成が確認されるものは比較的予後が良いとされる。膵癌は概して予後が悪いものの、LFCの形成が癌占拠部の内側に確認されるものは少数症例であるが高い予後良好な因子になることが明らかとなっている。LFCは2次リンパ装置同様免疫反応を制御していると推定されている。しかしながら、その形成・維持機序は不明な点が多い。本研究では、免疫学的視点のみならず、これまでの形態学的観察に基づく病理学的視点から膵癌におけるLFCの形成のメカニズムについてアプローチしていく。我々がLFCの形成が組織学的に確認された膵癌パラ

フィン切片を用いて免疫組織化学検査を行ったところ、リンパ装置形成部間質の血管周囲に、CXCL13（リンパ組織誘導細胞（LTi cell）を誘導するケモカイン）が高度に集積していることが判明した。近年ケモカインの集積に関して、Heparan sulfate (HS)の役割が解明されつつあり、CXCL13に関して特に親和性が高いとされるHSの配列が報告されている。膵癌LFCにおいて、形成に必要とされるCXCL13の集積の背景には血管周囲に特定のHSの発現があると考え、それをヒト膵癌検体で証明することを目的とした。LFCに特定のHSが発現していることを証明する方法として、1) 組織切片上で、特定のHS配列が発現していることを可視化して証明する方法、2) 細胞レベルでこれらのHS配列の産生が促進されていることを証明する方法、の2種類のアプローチで研究を遂行する。

「点検・評価」

例年通り、病理学講座では主として卒前・卒後教育、病院病理部では診断業務が遂行された。講座医師、教員は、3年生、4年生の講義と病理学実習、3年生のコース研究室配属、その他を担当し、きめ細かな教育・指導を行った。病院病理部出向医師は、17,202例の病理組織診断、14,370例の細胞診断、27例の剖検診断（いずれも本院のみのデータ）などをはじめとする病理診断を主軸とする業務に携わり、これを遂行した。さらに講座・病理部出向教職員が協同して、臨床各科との症例検討会、個々の症例に関する臨床医とのディスカッションを通して、医療に貢献した。

講座担当教授選挙にまつわる前代未聞の事態に見舞われ、2019年3月末で6名の退職者、休職者を出すこととなった。その結果、講座と4病院を含むスタッフの再編を余儀なくされた。同時に分院では病理診断業務の一部を衛生検査所に外注委託するという事態に陥り、それは現在も続いている。我々の人体病理学的研究手法は病理診断された材料を研究応用しており、臨床検体を病理検査として外部に委ねることは、まさに研究の根幹を揺るがしかねない事象である。この非常事態から一刻も早く脱却するべく、残存スタッフの英知を結集した。分院で実力をつけた若手スタッフから様々な意見を吸い上げ、業務上の無駄を最小限にし、まずは臨床各科との症例検討会や共同研究の充実化を図ることにより、診断業務から研究への展開を模索した。その結果、悪性リンパ腫を主とする血液腫瘍、乳腺、鼻科の各領域において新たに研究へのシーズが創出されてきた。

また既存の研究領域（消化管，婦人科，泌尿器科，呼吸器，脳神経，剖検）からは，まさに診断業務に忙殺される合間を縫って地道な研究活動が実施され，高インパクトファクターを含む複数の原著論文が受理・発表されたことは，まさに個々人の努力の賜物である。その他，若手スタッフは症例報告や学会発表などを通して研究活動を継続している。そこでは若手スタッフ間での屋根瓦方式での指導により，レジデントレベルの医師の研究スキルアップにつながっている。

とはいえ，スタッフ数の劇的な減少により，スタッフ全員が研究に割く時間的余裕を有しているかといえば，それは否と言わざるを得ない。ことに分院医師にはこの傾向が顕著であり，日々の診断業務に忙殺されているのが現実であろう。この点を打開するためには，早急に専門医を育成し，同時に研究マインドを涵養していくことが今後の重要課題である。これには短期的解決は望みにくく，中長期的に地道に歩を進めていく必要がある。幸いなことに，このような状況にもかかわらず次年に向け，新たに3名の入局者を迎えることができている。また既存のスタッフの年齢構成より，ここからは入局後10年以内の医師が中心になって講座・病院病理部全体をリードしていく日はすぐにやってくると思われる。彼らが診断病理医として，そして研究者として十分なモチベーションを持てるよう，そして十分に実力を発揮できるよう，一致団結してこの難局を乗り切ることが重要である。

研究業績

I. 原著論文

- 1) Yabuuchi Y, Hotta K, Aizawa D. An unusual lesion of the colon resembling a submucosal tumor. *Gastroenterology* 2019; 156(6): 1578-9.
- 2) Fujiya K, Ohshima K, Kitagawa Y, Hatakeyama K, Nagashima T, Aizawa D, Sugino T, Urakami K, Yamaguchi K, Terashima M. Aberrant expression of Wnt/ β -catenin signaling pathway genes in aggressive malignant gastric gastrointestinal stromal tumors. *Eur J Surg Oncol* 2020; 46(6): 1080-7. Epub 2020 Feb 26.
- 3) 岩本雅美. 【胎盤I 胎盤病理診断 基礎編】胎盤の取り扱いと切り出し. *病理と臨* 2019; 37(9): 819-26.
- 4) Kuroda T, Ogiwara H, Sasaki M, Takahashi K, Yoshida H, Kiyokawa T, Sudo K, Tamura K, Kato T, Okamoto A, Kohno T. Therapeutic preferability of gemcitabine for ARID1A-deficient ovarian clear cell carcinoma. *Gynecol Oncol* 2019; 155(3): 489-98.
- 5) Takenaka M, Kobel M, Garsed DW, Fereday S, Pandey A, Etemadmoghadam D, Hendley J, Kawabata A, Noguchi D, Yanaihara N, Takahashi H, Kiyokawa T, Ikegami M, Takano H, Isonishi S, Ochiai K, Traficante N, Gadipally S, Semple T, Vassiliadis D, Amarasinghe K, Li J, Mir Arnau G, Okamoto A, Friedlander M, Bowtell DDL. Survival following chemotherapy in ovarian clear cell carcinoma is not associated with pathological misclassification of tumor histotype. *Clin Cancer Res* 2019; 25(13): 3962-73.
- 6) Horiguchi A, Umezawa T, Umemori M, Ito S, Tsuchiya S, Hirooka S, Kiyokawa T, Ikegami M, Takahashi H, Soejima Y, Sawabe M. Application of cell block preparation in effusion cytology: analysis of mismatched diagnosis and utility of immunostaining. *J Med Dent Sci* 2020; 67: 21-9.
- 7) Tate S, Nishikimi K, Kato K, Matsuoka A, Kambe M, Kiyokawa T, Shozu M. Microscopic diseases remain in initial disseminated sites after neoadjuvant chemotherapy for stage III/IV ovarian, tubal, and primary peritoneal cancer. *J Gynecol Oncol* 2020; 31(3): e34. Epub 2019 Dec 9.
- 8) Honda M, Kimura T, Kamata Y, Tashiro K, Kimura S, Koike Y, Sato S, Yorozu T, Furusato B, Takahashi H, Kiyota H, Egawa S. Differential expression of androgen receptor variants in hormone-sensitive prostate cancer xenografts, castration-resistant sublines, and patient specimens according to the treatment sequence. *Prostate* 2019; 79(9): 1043-52.
- 9) Yorozu T, Sato S, Kimura T, Iwatani K, Onuma H, Yanagisawa T, Miki J, Egawa S, Ikegami M, Takahashi H. HER2 status in molecular subtypes of urothelial carcinoma of the renal pelvis and ureter. *Clin Genitourin Cancer* 2020; 18(4): e443-9. Epub 2019 Dec 13.
- 10) Sato S, Kimura T, Yorozu T, Onuma H, Iwatani K, Egawa S, Ikegami M, Takahashi H. Cases having a Gleason score 3+4=7 with <5% of Gleason pattern 4 in prostate needle biopsy show similar failure-free survival and adverse pathology prevalence to Gleason score 6 cases in a radical prostatectomy cohort. *Am J Surg Pathol* 2019; 43(11): 1560-5.
- 11) Matsushima S, Shimizu T, Fukasawa N, Ojiri H. Novel characteristic skull magnetic resonance imaging features associated with meningioma. *J Comput Assist Tomogr* 2019; 43(5): 708-12.
- 12) Sasaki T, Tsuboi N, Okabayashi Y, Haruhara K, Kanzaki G, Koike K, Takahashi H, Ikegami M, Shimi-

- zu A, Yokoo T. Synergistic impact of diabetes and hypertension on the progression and distribution of glomerular histopathological lesions. *Am J Hypertens* 2019; 32(9) : 900-8.
- 13) Okabayashi Y, Tsuboi N, Kanzaki G, Sasaki T, Haruhara K, Koike K, Takahashi H, Ikegami M, Shimizu A, Yokoo T. Aging vs. hypertension: an autopsy study of sclerotic renal histopathological lesions in adults with normal renal function. *Am J Hypertens* 2019; 32(7) : 676-83.
- 14) Yokoyama H, Masaki T, Inoue I, Nakamura M, Mezaki Y, Saeki C, Oikawa T, Saruta M, Takahashi H, Ikegami M, Hano H, Ikejima K, Kojima S, Matsuuura T. Histological and biochemical evaluation of transforming growth factor- β activation and its clinical significance in patients with chronic liver disease. *Heliyon* 2019; 5(2) : e01231.
- 15) 小池裕人, 羽野 寛, 池上雅博. 慢性ウイルス性肝炎の早期における門脈血管構築傷害の3次元観察 肝小葉構造改変の観点から. 慈恵医大誌 2019; 134(2) : 27-36.
- 16) Goda K, Dobashi A, Yoshimura N, Hara Y, Tamai N, Sumiyama K, Ikegami M, Tajiri H. Dye solution optimizing staining conditions for in vivo endocytoscopy for normal villi and superficial epithelial tumors in the duodenum. *Ann Gastroenterol* 2019; 32(4) : 378-86.
- 17) Hamura R, Koyama T, Kawamura M, Kawamura T, Nakamura M, Yanaga K. Gastric calcifying fibrous tumor suspected to be complicated with immunoglobulin G4-related disease treated by laparoscopy and endoscopy cooperative surgery: a case report. *Surg Case Rep* 2019; 5(1) : 150.
- 18) Katagi H, Louis N, Unruh D, Sasaki T, He X, Zhang A, Ma Q, Piunti A, Shimazu Y, Lamano JB, Carcaboso AM, Tian X, Seluanov A, Gorbunova V, Laurie KL, Kondo A, Wadhwani NR, Lulla R, Goldman S, Venneti S, Becher OJ, Zou L, Shilatifard A, Hashizume R. Radiosensitization by histone H3 demethylase inhibition in diffuse intrinsic pontine glioma. *Clin Cancer Res* 2019; 25(18) : 5572-83.
- 19) Tsvankin V, Hashizume R, Katagi H, Herndon JE, Lascola C, Venkatraman TN, Picard D, Burrus B, Becher OJ, Thompson EM. ABC transporter inhibition plus dexamethasone enhances the efficacy of convection enhanced delivery in H3.3K27M mutant diffuse intrinsic pontine glioma. *Neurosurgery* 2020; 86(5) : 742-51. Epub 2019 June 21.
- 20) 梅澤 敬, 廣岡信一, 梅森宮加, 鈴木英瑛, 伊藤聡史, 堀口絢奈, 土屋幸子, 沢辺元司, 九十九葉子, 坂本穆彦. 手術材料で診断された甲状腺乳頭癌100例を用いた liquid-based FNAC の有用性についての評価. 診断病理 2019; 36(4) : 278-83.
- 21) Yokoyama-Mashima S, Yogosawa S, Kanegae Y, Hirooka S, Yoshida S, Horiuchi T, Ohashi T, Yanaga K, Saruta M, Oikawa T, Yoshida K. Forced expression of DYRK2 exerts anti-tumor effects via apoptotic induction in liver cancer. *Cancer Lett* 2019; 451 : 100-9.
- 22) Mori S, Noda Y, Kato D, Hirooka S, Ohtsuka T. Desmoid-type fibromatosis arising in a bifid rib chest wall. *Gen Thorac Cardiovasc Surg* 2019; 67(11) : 996-8.
- 23) Kumamoto T, Yamada K, Yoshida S, Aoki K, Hirooka S, Eto K, Yanaga K, Yoshida K. Impairment of DYRK2 by DNMT1-mediated transcription augments carcinogenesis in human colorectal cancer. *Int J Oncol* 2020; 56(6) : 1529-39. Epub 2020 Mar 20.
- 24) Akutsu T, Okada S, Hirooka S, Ikegami M, Ohdaira H, Suzuki Y, Urashima M. Effect of vitamin D on relapse-free survival in a subgroup of patients with p53 protein-positive digestive tract cancer: a post hoc analysis of the AMATERASU trial. *Cancer Epidemiol Biomarkers Prev* 2020; 29(2) : 406-13.
- 25) Ibuki E, Shiraiishi A, Sofue T, Kushida Y, Kadota K, Honda K, Kang D, Joh K, Minamino T, Haba R. Characteristic electron-microscopic features of cryofibrinogen-associated glomerulonephritis: a case report. *BMC Nephrol* 2020; 21(1) : 27.
- 26) Sawamura M, Komatsuda A, Kaga H, Saito A, Yasuda T, Wakui H, Joh K, Takahashi N. Membranous nephropathy with solitary polyclonal IgA deposition: a case report and literature review. *Clin Nephrol Case Stud* 2019; 7 : 60-5.
- 27) Wester Trejo MAC, van Daalen EE, Berden AE, Wolterbeek R, van Es LA, Bos WJW, Ferrario F, Hagen EC, Jennette JC, Joh K, Neumann I, Noël LH, Pusey CD, Bruijn JA, Bajema IM. A renal risk score for ANCA-associated glomerulonephritis. *Kidney Int* 2019; 96(1) : 245.

II. 総 説

- 1) 池上雅博, 廣岡信一, 中村麻子, 会澤大介, 深澤 寧, 村上慶四郎, 牧島 玲, 木村寛子, 保坂倫子. 【隆起型早期大腸癌の病態と診断】PG type と NPG type 早期大腸癌の相違 発育・進展様式を含めて. 胃と腸 2019; 54(6) : 810-8.
- 2) 清川貴子. 【胸膜・腹膜の病理】女性の腹膜病変(中皮腫を除く). 病理と臨 2019; 37(11) : 1104-9.

- 3) 清川貴子. 女性生殖器腫瘍の世界保健機関 (WHO) 組織分類 (第5版). 病理と臨 2020 ; 38(2) : 179-81.
- 4) 池上雅博. 【消化管疾患の分類 2019-使い方, 使われ方】小腸・大腸 大腸腫瘍 PG・NPG 分類. 胃と腸 2019 ; 54(5) : 668-9.
- 5) 城 謙輔. 【尿管間質障害-最新の知見】血液疾患に伴う尿管間質障害 軽鎖近位尿管症. 腎と透析 2019 ; 87(2) : 314-8.
- 6) 佐藤直実, 城 謙輔. C3 腎症からみた一次性膜性増殖性糸球体腎炎の再検討. 日児腎誌 2019 ; 32(1) : 3-11.

Ⅲ. 学会発表

- 1) 千葉 諭, 保坂倫子, 木村寛子, 牧島 玲, 中村麻子, 原田 徹, 遠藤泰彦, 濱谷茂治, 鈴木正章, 池上雅博. (ポスター) タコツボ心筋症を発症したと思われる脳動脈瘤破裂によるクモ膜下出血の1剖検例. 第108回日本病理学会総会. 東京, 5月. [日病理会誌 2019 ; 108(1) : 344]
- 2) 会澤大介, 堀田欣一, 下田忠和. (口頭) T1 大腸癌の臨床病理学的検討. 第97回日本消化器内視鏡学会総会. 東京, 5月. [Gastroenterol Endosc 2019 ; 61(Suppl.1) : 912]
- 3) Selenica P, Alemar B, Emanuela V, Talia KL, McCluggage WG, Mikami Y, Kiyokawa T, Weigelt B, Park KJ, Muralil R. massively parallel sequencing analysis of gastric-type cervical adenocarcinomas reveals mutations in cell cycle-related genes and rare potentially targetable ERBB2 mutations related genes and rare potentially targetable ERBB2 mutations. USCAP (United States and Canadian Academy of Pathology) 109th Annual Meeting. Los Angeles, Feb. [Mod Pathol 2020 ; 33(Suppl.2) : 1130]
- 4) 清川貴子. (コンパニオンミーティング5 : 国際病理アカデミー日本支部 (The Japanese Division of the International Academy of Pathology (JDIAP))) 婦人科病理ふあんだめんたる) 子宮頸癌の病理診断 : 「取扱い規約第4版」で何が変わったのか. 第108回日本病理学会総会. 東京, 5月.
- 5) Kiyokawa T, Hoang L, Terinte C, Pesci A, Aviel-Ronen S, Alvarado-Cabrero I, Oliva E, Park KJ, Soslow RA, Stolnicu S. Trefol factor 2 (TFF2) as a surrogate marker for endocervical gastric-type carcinoma. 31st European Congress of Pathology. Nice, Sept.
- 6) 清川貴子. (ランチョンセミナー6 : MSI-High 固形癌における臨床と病理の役割) ゲノム時代における婦人科腫瘍における精度管理の重要性. 第58回日本臨床細胞学会秋期大会. 岡山, 11月.
- 7) 鈴木英璃, 伊藤聡史, 佐藤 峻, 廣岡信一, 鷹橋浩幸. (ポスター) 細胞診で診断に難渋した上皮筋上皮癌の一例. 第58回日本臨床細胞学会秋期大会. 岡山, 11月. [日臨細胞会誌 2019 ; 58(Suppl.2) : 678]
- 8) 梅森宮加, 倉田盛人, 佐藤 峻, 鷹橋浩幸, 北川昌伸. (ポスター) 前立腺癌における PVT1 の病理学的検討. 第108回日本病理学会総会. 東京, 5月. [日病理会誌 2019 ; 108(1) : 403]
- 9) 佐藤 峻, 萬 昂士, 木村高弘, 池上雅博, 鷹橋浩幸. (口頭) 生検グリソンスコア 3 + 4 = 7 の症例における, グリソンパターン 4 の割合の大きい小型癌巢の存在意義. 第108回日本病理学会総会. 東京, 5月. [日病理会誌 2019 ; 108(1) : 299]
- 10) 萬 昂士, 佐藤 峻, 池上雅博, 鷹橋浩幸. (口頭) 上部尿路上皮癌における PAX8 発現と免疫組織化学的亜型分類についての臨床病理学的検討. 第108回日本病理学会総会. 東京, 5月. [日病理会誌 2019 ; 108(1) : 299]
- 11) 前田未来, 福田隆浩, 三宅美佐代, 鈴木正章, 鷹橋浩幸, 池上雅博. 顆粒球コロニー刺激因子 (G-CSF) 産生孤立性線維性腫瘍/血管周皮腫 (SFT/HPC) の一例. 第108回日本病理学会総会. 東京, 5月. [日病理会誌 2019 ; 108(1) : 481]
- 12) 鹿 智恵. (ポスター) 肺扁平上皮癌の発生過程における 3p22 領域の欠損と意義. 第108回日本病理学会総会. 東京, 5月. [日病理会誌 2019 ; 108(1) : 349]
- 13) 中村麻子, 濱谷茂治, 保坂倫子, 木村寛子, 牧島 玲, 鹿 智恵, 千葉 諭, 井田圭亮, 池上雅博. (ポスター) 腹腔内腫瘍を契機に発見された多発小腸神経内分泌腫瘍の1例. 第108回日本病理学会総会. 東京, 5月. [日病理会誌 2019 ; 108(1) : 371-2]
- 14) 深澤 寧, 橋本 透. (シンポジウム4 : 頭頸部頭蓋底病変) 頭蓋底病変の病理. 第39回日本画像医学学会学術集会. 東京, 2月. [Jap J Diag Imaging 2020 ; 38(1) : 37]
- 15) 鷹橋浩幸. (要望講演2) 前立腺癌の新グレード分類と最近の動向. 第60回日本臨床細胞学会総会 (春期大会). 東京, 6月. [日臨細胞会誌 2019 ; 58(Suppl.1) : 106]
- 16) Joh K, Nakazato T, Hashiguchi A, Shimizu A, Hisano S, Katafuchi R, Kawamura T. Histological classifications in IgA nephropathy should be considered for predicting not only renal functional decline but also for treatment's response. ASN (American Society of Nephrology) Kidney Week 2019. Washington, D.C., Nov.
- 17) 城 謙輔, 中里 毅, 橋口明典, 清水 章, 久野 敏, 片渕律子, 川村哲也. (ポスター) IgA 腎症の Oxford

分類と日本分類（組織学的重症度分類）の腎機能予後予測に関する比較. 第62回日本腎臓学会学術総会. 名古屋, 6月. [日腎会誌 2019; 61(3): 394]

IV. 著 書

- 1) 清川貴子. Ⅲ章: 婦人科腫瘍・疾患の組織学的分類 A. 子宮頸部腫瘍. 片淵秀隆, 楢 靖編. 一冊でわかる婦人科腫瘍の画像診断: モダリティ・解剖・病理・診断・治療フォローアップ・ピットフォール. 東京: 文光堂, 2019. p.38-9.
- 2) 城 謙輔. V. IgA 腎症の病理 2. 組織学的重症度分類（日本分類）と Oxford 分類の比較. 富野康日己監修, 川村哲也, 鈴木祐介編. IgA 腎症の病態と治療. 東京: 中外医学社, 2019. p.170-7.

V. その他

- 1) Watanabe N, Saito K, Kiritani A, Fujimoto S, Yamanaka Y, Fujisaki I, Hosoda C, Miyagawa H, Seki Y, Kinoshita A, Takeda H, Endo Y, Kuwano K. A case of invasive pulmonary aspergillosis diagnosed by transbronchial lung biopsy during treatment for diabetic ketoacidosis in a type 1 diabetic patient. J Infect Chemother 2020; 26(2): 274-8
- 2) 三宅美佐代, 会澤大介, 廣岡信一, 原田 徹, 鈴木 瑛太郎, 清川貴子. 豊富な異所性成分を伴う卵巣中分化型セルトリ・ライディッヒ細胞腫の1例. 診断病理 2019; 36(3): 188-92.
- 3) Kakushima N, Aizawa D, Yoshida M, Ito S, Satoh T, Ono H, Terashima M, Kagawa H, Shimoda T. A Rare Case of Hypertrophic Gastropathy with Adenocarcinoma Arising from a Gastric-type Adenoma. Intern Med 2019; 58(13): 1877-83.
- 4) 北井里実, 尾上 薫, 山田恭輔, 菊地 亮, 佐藤 峻, 尾尻博也. 【腹部の最新画像情報 2019】 卵巣低異型度漿液性癌の1例. 臨放 2019; 64(7): 969-73.
- 5) 塩崎弘憲, 恩田真二, 佐藤 峻, 大木一剛, 矢永勝彦. 悪性腫瘍との鑑別が困難であった肝偽リンパ腫の1症例. Liver Cancer 2019; 25: 65-9.

ウイルス学講座

教授: 近藤 一博 ウイルス学, 分子生物学
講師: 小林 伸行 ウイルス学, 精神医学

教育・研究概要

I. 教育概要

1. 医学科講義・実習

3年生のコース臨床基礎医学のユニット「ウイルスと感染」の講義を16コマ担当し、ウイルス学の基礎とウイルスと関係する疾患の基礎的な理解のための講義を行った。ユニット「ウイルス学実習」は、5コマの実習を行った。講義・実習ともに、ウイルス感染症の病態、診断、治療、予防など、将来、医師としてウイルス感染症に対処できるための基礎を学習することを重視した。さらに、最近の本学入学者の研究者指向に合わせるべく、医学者として、原因不明の疾患の研究、新しい感染症の出現、ウイルスを利用した医療に対応できる基礎力をつけられる様に配慮した。また、研究不正に関する内容も講義に盛り込んだ。ユニット「感染免疫テュートリアル」、コース研究室配属のユニット「研究室配属」、「Early research exposure」も担当し、研究やテュートリアルを通して学生の感染症学への理解を深めることに努めた。

2. 看護学科講義

ウイルス学の講義を6コマ担当した。

3. 看護学校講義

慈恵看護専門学校においてウイルス学の講義を16コマ担当した。

4. オープンキャンパス

ウイルス学講座で行っているウイルスと疲労の研究を、私立大学研究ブランディング事業との関連とともにオープンキャンパスで、講演とポスター展示にて受験生と受験生の父兄に対して紹介した。

II. 研究概要

疲労や疲勞によってもたらされるうつ病などの疾患は社会的に大きな問題となっている。ウイルス学講座では、これらの問題に対し、ヘルペスウイルスの研究を通して解決することを目的としている。ウイルスは、寄生する宿主に完全に依存しているため、宿主との相互作用が強く、ウイルスの研究は、これまでにガン研究や遺伝子研究に多くの知見をもたらした。我々は、特にヒトとの関係が深い、潜伏感染中のヘルペスウイルスとヒトとの関係を探求するこ